一日旅行記

創離

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
一日旅行記

【Ｎコード】
Ｎ３１０９Ｖ

【作者名】
創離

【あらすじ】
その日は曇りだった。そんな曇り空の中でも彼女は綺麗だった

（前書き）

かなり削った。本当は電車の中でポーカーとかダウトとかで対戦するシーンとかあったけど、だいぶ削った

その日は曇りだった。
女性が絵になるのは晴れか雨の日だから、曇りの中にあんなに輝いていた彼女はきっと誰よりもきれいなのだろうと思った。
「ちょっと良いかしら」
彼女がそうつぶやいた。ベンチに座って見ていた僕に向かって掛けられた声だと気付かずに彼女を見つめる。
「そこの、ベンチに座ってるあなたよ。お願いあるの」
あぁ、僕か。そう思い驚きながらも内心少し興奮していた。
「ありがとう。名前は？」
僕は僕の名前を答えた。
「いい名前ね、まぁそれはどうでもいいわ」
僕は苦笑いを浮かべてた。
「ここはどこ？」
彼女は迷子の様だった。僕より二つ年上みたいだから迷子と表現するのは躊躇われるが。
「そう、それじゃ」
彼女は彼女が行きたい場所の住所を口にした。
「ここなのだけれど」
僕は少し……いや、かなり驚いていた。なぜなら隣の県だったからだ。
「どうしたの？　この住所に行きたいのだけれど」
僕は少し間をおいて笑いかけた。そして、良いですよ案内します、と彼女に告げた。
「そう、それじゃお願いするわ」
学校はここ半年行った記憶がなかったし、何より死ぬ前にこんな綺麗な人に出会えたんだから、何か善行をつんでおこうと思っただけだ。要するに気まぐれ。

「ここからどのくらいかかるかしら」
彼女の問いに、六時間位だと答えた。隣の県と言っても、細かい住所を探すのを合わせたらその位かかると思ったからだ。実際には七時間かかった。
「そう、それじゃ行きましょう」
彼女が駅と真逆の方向に歩き出し僕は幸せな気分で、こっちですよ、と声をかけた。少し頬を赤らめた彼女はとても可愛らしかった。
「ありがとう、それじゃ行きましょう」
そう言って今度は僕の隣を歩き始めた。
駅に着くまでに、彼女の名前を聞きだすことに成功した。
それから、電車の中で知ったのだが彼女はイタリア人とのハーフらしい。

電車の中で、彼女と出会って3時間が経とうとしていた事に気がついた。
時間的には一時位だった。
彼女にお腹はすいていないかと尋ねると
「大丈夫よ、私あまり食べないの」
そう言って彼女はトランプをきる。膝にはさっき渡したブーケが置かれていた。
手札は最初からフルハウスが揃っていた。
「二枚変えるわ」
そう言って彼女は二枚のカードを変えた。
おそらくいいカードが揃っていたのだろうが、僕がカードをノーチェンジと言うと素直に降りた。彼女は良くも悪くも素直なのだ。
そうして次の駅に着き、僕は弁当を二つ買って席に戻った。俗に言う駅弁と言う奴だろうが、あまりおいしかった記憶がない。なんか、あんまり食べる部分のない蟹の様な印象を受けた。
そうだ、確かその印象を彼女に話したら

「ふふふ、はずれね。お腹がすいてるんならお菓子でも買った方がマシだった？」
とダメだしされた。
僕が素直に、そうですねと答えるとうまい棒をくれた。なぜ彼女がうまい棒を持っていたのか謎だが……。
そんなこんなで、結局彼女の為に買ってきた弁当は手つかずで、後ろの席の人に上げた。
決して若くはないが、まだまだ元気そうな老人だった。大層喜ばれて、手をすり合わせて念仏を唱え始めたので苦笑いで前に視線を戻した。
彼が降りるときにやっぱりうまい棒を貰った。……なぜだ。
時刻は二時、電車での移動もあと一時間と言う所で事件は起こった。
僕が不注意でリュックの中身をぶちまけたのだ。足元に置いていたのは間違いだった。
どうなったかは言うまでも無いだろう。
ぶちまけられた中身、ロープだとか、ライターだとか、練炭だとか、その他もろもろの自殺の定番と言えるモノだ。
女性を誘拐した揚句、無理心中。
そこまでは見られなくても、危ない奴にみられた事に違いない。
まぁ、実際危ない奴なんだが。
「ねえ、それは何！」
周りが騒然としている中、彼女は怯えず堂々と聞いて来た。
僕はそれに対して、苦笑いでこう答えた。『あぁ、ちょっと自殺をね』、と。
苦笑いのつもりだったが、実際にどんな表情だったかは分からない。ただ、苦笑いになっていなかったからか、それとも苦笑いだったからなのか、彼女は泣きそうなそれでいて怒っているような顔をしていた。
「君は……！」

僕はそんな彼女を前にして、荷物を戻していった。
その後、一時間ほど僕らは無言だった。
彼女も、送ってくれるだけの人間に対して感情的にモノを言う程子供でもなかったのだろう。
そう、これは気まぐれだったんだから。
彼女が綺麗だったから、死ぬ前に少し関わって見ただけ。
彼女も、目的地にたどり着きたかったから僕を利用しただけ。
その過程で、少し気まずくなる事が起きただけ。
別にどこでやめてもよかったけど、彼女がもういいと言わなかったから僕は彼女の道案内を続けることにした。

三時、予告した六時間まであと一時間となったころだ。
その頃には電車から降りていた。彼女の目的地を探して住宅地を歩きまわっていた。
その考えが甘かった訳だが……。
あの事件以来、彼女はすっかり不機嫌になってしまい基本しゃべらなくなってしまった。
その上、基本家から出た事がないそうで、いつもこの辺には車で来ているから歩いても見覚えのある道が分からないそうであった。
まぁ、目的地の隣の県をさまよっていた位だから方向感覚やらは期待してはいけないのだろう。
「ねぇ、大丈夫なの？」
彼女がそう言って電柱を指すと、目的地とは別の地名だったり、三丁目だったり、町を彷徨いまくった。
この時気付いたのだ、はっきり言って僕は余計な事をしてるんじゃないかと。
交番にでも連れて行くのが正しい選択だったのだろう。
まぁ、そもそもこの時の僕にとって彼女を目的地に連れて行くこ

とが目的ではなかった訳だが……。
「むー、この辺は見覚えがあるわ。この辺かもしれないわ」
彼女がそう言うので僕は言われるままに道を進んでいった。
すると、一軒の小さな店にたどり着いた。
「むー、確かに来た事はあるが」
どうも昔来た事がある店であるらしいが、目的地とは違う場所の様だった。
この時、予告時間の四時だった。少し正確にすると、四時十二分位だったか。
それに気付かないのか、彼女は
「ここでお茶にしましょう」
と言ってきた。そこまで急いでなかったのかもしれない。
まぁとにかく、僕はその店で彼女とお茶をする事になった。相変わらず不機嫌なままだったが。
「この特製ケーキとコーヒー」
あなたは？　と言う目を向けてきたので、取りあえず紅茶を頼んでおいた。
そうして、注文した商品が運ばれてくると彼女はおもむろに口を開いた。
「さっきのあれ」
しかし、うまく言葉が見つからないのか先に話が進まなかった。
「自殺するって、どういう意味？」
僕は、出来る限り笑った。そうして答えた。このままの意味です、と。
「おかしいわ、どうして？」
きっと、彼女はその理由が本当に分からなかったのだろう。
自殺する理由、そんな物はなかった。
いや、なかった訳ではない。確かに存在はしていた。
だけど、それは一般に死んではいけない理由で、きっと人として最悪な死に方で、最低な人間のいい訳なのだろう。

だから、僕はほほ笑むことしかできなかった。
「……それじゃ、理由は話さなくていいわ。だから、今日死ぬのはやめなさい。今日は、私にとって大切な日なのだから、死なれたら気分が悪いわ」
僕はそれに同意した。今日は死なないと、彼女と固く約束した。守れる筈のない約束を、僕はこの時交わした。
その後からだっただろうか、彼女の機嫌は少しづつ戻っていった。お茶を済ませたのは四時三十二分だった。
彼女の目的地に着くまでおおよそ残り二十八分。
そろそろここで彼女の目的地について語っておこうと思う。
端的に言えば、彼女の目的地は彼女の誕生パーティの会場だった。どこかの会社の令嬢らしい。普通ならそう聞くと身につけている服も素晴らしい物に見えてくるだろう。僕はそうは感じなかったけど。
だって、彼女の前には綺麗な服なんて霞んでしまうから。
話を戻す。
この二十八分、彼女と沢山の事を話した。
話を聞くと、僕のイメージの中の令嬢とはほとんど違っていた。普通に漫画も読むらしいし、テレビなんかも見るらしい。ジャニーズなんかはグループすべて知っているそうだ。
好きな食べ物は、ひもQだと言っていた。むしろなんかすごかった。一般人でひもQが好物だと自信を持って答えられるのは小学1年生位のものだろう。
将来は会社を継ぐのかと聞くと
「私は継げないわ。継ぐのは私と結婚する誰かね」
そう語っていた。
そう答えてくれた事に驚いて、次はこう質問してみた。どうして今日会ったばかりの自分の質問に答えてくれるのかと。
「え？　だって、君は悪い人には見えないもの」
そう答えが返ってきた。

なんだかんだと言っても、やはりお譲さまだったらしい。
その甘さで自殺する人間も少なくないのに……。まぁ、僕は違うけど。

？

着いた先は、でっかい屋敷だった。
どうしてココが分からなかったのか、分からなかった。
「ここよ、ありがとう。あなたのおかげでここまで来れたわ」
僕は、交番に行けばもっと早かったかもしれないけど……、と自嘲気味に笑って答えた。
「そうね、でも楽しかったわ。普通の人の事が分かったもの」
僕が普通なのかは分からなかったが、彼女が笑ってくれて頬にキスをしてくれた。
「あら？　あぁ、そう言えば日本ではこういうのは違ったわね。ごめんなさい、色々な国を回ってるから混ざっちゃったわ」
ふふふ、と笑った彼女の顔が、嘘である事を物語っていた。
「それじゃ、またね」
最後に彼女は僕の名前を呼んで、屋敷の中に去っていった。
僕はそれを見送る。それが昨日の、いやぎりぎり今日の出来事だった。
午後十一時四十二分、僕は未だにこの住宅街に居た。
死ぬこともできず、かと言って家に帰る訳でもなく。
そうだ、今日の内にここを車が通ったらそれに引かれて死のう。
本日初めて死ぬ当てがついた。
そうなると、遺書を書かなくては。
僕は彼女との戦歴の書かれたページをめくり、ペンを取り出した。
すると、辺りが少し明るくなる。
きっと車が来たのだろう。もう少し待ってくれてもいいのに。
僕は、それに飛び込んだ。
あぁ、高級そうな車だな。

（後書き）

さて、新しい物語のつづり方と言うことで試して見ました。
この話の書き方、主人公が過去を語るのをイメージして書きましたが、元ネタは英語の教科書です。

あ、内容は別物です。書き方だけです。
確か、教科書の方はジョンかなんかがスペイン語かなんかを勉強するとかしないとかの話だった。……フランス語だっけ？

まぁ、そんな訳であまり内容には凝ってません。

そうだ、前書きで言ったけどだいぶ削ったんですよ。

本当はエピローグまであって、一応はハッピーエンドになってました。
でもなんか

「……正直、入れるべきか？」

と、悩んだ結果入れない事にしました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3109v/

一日旅行記

2011年7月30日03時22分発行